The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	武漢における都市文化の形成と受容
Author(s)	瀬邊, 啓子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43287
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	瀬邊啓子（せべけいこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　16483　号
学位授与年月日	平成13年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**武漢における都市文化の形成と受容**
論文審査委員	（主査） 教授　深澤　一幸 （副査） 教授　金崎　春幸　　教授　北村　卓

論文内容の要旨

本論文は、文革以降に形成された“漢味”小説と呼称される武漢の都市文学を資料に、都市文化がいかに消化され漢味小説に昇華されたのかという点を研究対象としている。研究方法としては、漢味の形成の過程を探り、漢味のような文化提示の必要性がどこにあったのかということを、歴史的背景や社会的条件などの側面から分析した。

序論では、本研究で取上げる文革終息後の地域文学形成の背景を紹介し、本論文の研究方法及び論文の構成とその意義について言及した。さらに文献として使用する都市文化とリアリズムの関係と本論文で使用する「都市」などの用語の定義を提示した。

第1章では、文革終息後から“漢味”形成前夜までの武漢の小説を紹介、考察を加えた。特に湖北短篇小説の活躍が顕著であった1982年に着目し、作品分析を行った。またそれら作品の活躍の裏には、武漢（市）作家協会成立があった。この武漢作協が短編小説及びその後の漢味小説の形成にどのような影響を及ぼしたのか、成立大会の発言から考察を加えた。この大会では手法としてのリアリズムと題材としての身近な生活という指針が示され、この指針が漢味小説の性格を決定付けたのである。また武漢文壇が青年作家育成に力を注いだことが、82年の短篇小説の活躍を支え、その後漢味小説を形成する作家を養成することになったのである。

第2章では、漢味形成に大きな成果を上げた1987年を中心に、具体的な漢味小説を紹介、分析を行った。さらに84年以降の武漢作協、湖北作協などの武漢文壇の動向についても概観した。武漢文壇の動向で注目すべき点は、84、87年に雑誌『芳草』が都市生活文学創作の創作班並びに対話会を行い、武漢の都市文学形成への積極的な模索を行っていることである。しかし84年の創作班では呂運斌「漢正街風情録」を創出する成果を上げたが、87年は理論的な模索に留まり、池莉「煩悩人生」（『上海文学』87年8月）などの新写実小説とも呼称される本格的な漢味小説に発表の場を提供することができなかった。つまり漢味形成への気運を高め、環境を整えたものの、武漢の文藝機関は漢味形成に主導的な立場を取ることができなかったのである。

このような流れを追った上で、漢味小説の定義・特徴について考察を加えた。漢味の定義としては、武漢の風味を持つことが前提となる。これを踏まえて樊星が『當代文學與地域文化』（華中師範大學出版社、1997）の中で、1）九頭鳥の性格、2）漢腔（武漢訛り）、3）武漢の風景の三点を漢味小説の特徴とした。これらの是非を検討すると、“九頭鳥”に象徴される多面性と武漢の風景描写については当てはまるが、武漢方言は必ず使用されているわけではない。ただし“漢腔”を武漢弁特有のユーモアとリズムと定義した場合は、漢味に漢腔が反映されていると言うこと

が可能になる。樊星の指摘は三点に留まるが、作風にも共通点がある。手法としてはリアリズムを使用し、題材としては庶民の普遍的生活に着目する。その中でも個人レヴェルの社会問題を描写する。特に池莉、方方は都市としての性質を強調し、その都市文化を漢味小説に昇華させた。さらには武漢式悪女である“悪鶏婆”の存在を挙げることができる。以上の要素・条件を兼ね備えている作品が漢味小説である。

第3章では、漢味形成の背景を他の地域小説との比較を通して考察した。比較の対象としては、伝統文化である楚文化をルーツとする点で共通する湖南と、87年に新写実主義の台頭と共に地域文学を形成した南京を中心とする江南地区の二箇所とした。

湖南は1920年代に沈従文が湖西に楚文化の伝統を見出したことに始まる郷土文学の伝統があり、文革を経た80年代初頭には沈従文の伝統を受け継いだ郷土文学が復興した。さらに85年に始まる“尋根［ルーツ探求］”でも韓少功を中心に、引き続き楚文化を積極的に作品に取り入れつつ、楚文学の持つ神話的な要素を取り入れることで、幻想的でありながらも、人間の営みはかえってリアルであるという独特の作風を生み出した。一方、武漢は近代から独自の地域文学を持たず、楚文化への誇りを持つものの、歴史的・地理的要因により楚文化の伝統はすでに失われており、湖南のような郷土文学への発展は望めなかった。

南京を中心とする江南地区では、長く首都であったという歴史的なプライドが存在していた。また作品の時代背景も現代ではなく清末から抗日戦争期にかけてのものが多い。これは上海の存在が都市として立ち遅れている南京のコンプレックスを刺激し、南京の誇りであり上海を卑下することが可能になる題材として、歴史に傾いたからである。また南京の地理的条件は武漢と同じく南北の所属が不明瞭であるが、この歴史へのプライドから南京は南方と自負している。一方、武漢は長い歴史を誇るが、南京のように首都機能を果たせる条件があるにもかかわらず、首都になったことがないと言える。また南北の別も言語は北方、文化は南方に属し、さらに四周の特徴を兼ね備えているために、内外共に明確にすることができない。

以上の比較から、漢味形成には伝統文化と歴史的・地理的条件からくる武漢のコンプレックスが大きく作用していることが明白であり、このコンプレックスが都市文学形成の要因となったのである。

第4章では、以上の点を踏まえ漢味小説の役割と漢味の文化提示について考察を加えた。その上で80年代後半になって漢味が形成された要因を分析した。

漢味小説の役割には武漢紹介の側面がある。これは武漢には独自の文化がないなどの概念が存在しており、この点が武漢のコンプレックスとなっていた。武漢独自の「小吃」文化や武漢弁を作品に積極的に盛り込み説明することで武漢文化への理解を促した。さらに武漢文化が複数文化であることを提示し、その複数文化性こそが武漢文化の最大の特徴であると示した。これは対外的には武漢文化のアピールであったが、内部に向けては武漢（人）のプライドを刺激し、自信回復につなげるという二重の側面を有していたのである。この紹介は漢味小説の武漢弁使用に象徴されているように90年代初頭まで続くが、漢味が認知されるようになると徐々に薄らぐ。

80年代初頭から模索されていた漢味が、80年代後半にようやく形成された要因は次の二点が挙げられる。一点は文革を通した共時的体験によるものである。文革以前のイデオロギーの否定は、アイデンティティの帰属先を喪失させた。これによりアイデンティティの帰属先を地域文化に求める“尋根”の流れが起きた。郷土文学による伝統文化への回帰から始められた尋根は、次第に都市へと移ることになった。都市へのベクトルは農村重視の政策の変更と近代化による都市の発展により拍車がかかり、漢味形成に繋がった。もう一点は漢味作家の多くが生粋の武漢人ではないことが挙げられる。武漢はそもそも漢口・漢陽・武昌の三鎮が統合されたもので、生粋の武漢人は漢口人、武昌人であった。このことが武漢を纏め上げられない要因の一つとなっており、漢味形成に至らなかった要因でもあった。一方、生粋の武漢人ではない作家たちは幼年期に武漢に転入するなど、長期に亙る武漢居住者であった。彼らは“尋根”などの社会的動向を受けてアイデンティティの帰属先を武漢に求めた。しかし武漢弁の存在などが生粋の武漢人ではないことを証明しており、コンプレックスとなっていた。この実質的には武漢人でありながら、完全な武漢人ではないという条件により、武漢文化を描写、紹介するだけではなく、客観的な視点を持ち得た。そこで初めて武漢文化の複数性が肯定され、かつその多様性こそが武漢文化の特徴と言うことができるようになったのである。また彼らの中庸性は武漢が南北のどちらでもありながら、どちらでもないという条件と符合し、漢口・武昌人でもなく真の意味での「武漢人」として武漢を描写し、宣伝することができたのである。

第5章では、結論として武漢のコンプレックスが漢味を形成し、かつ都市文化を消化することにより初めて漢味小説が体系的に提示されることに繋がったことを挙げた。そして中国における「都市」の定義を捉えにくくしている要因が武漢に代表される複合的要素にあることを提示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、文革以降に形成された“漢味”小説と呼ばれる武漢の都市文学を資料として、都市文化がいかに消化され漢味小説に昇華したのかという視点から、漢味の形成の過程と、漢味のような文化提示の必要性を、歴史的背景と社会的条件を考慮しつつ分析したものである。

本論文は、漢味小説の担い手たる池莉・方方などの作品はもちろん、おびただしい数量の武漢に関する文献資料を収集したうえで、それらを丹念に読み込むという、じつに手堅い基礎作業のもとに書き上げられており、各章ごとになされる著者の分析は、それゆえに極めて説得力を持つものとなっている。とくに、漢味小説の形成を論じた第2章においてそのことは顕著であり、またこの章をはさんでその内容を補強する役割を果たしている第1章「漢味小説の萌芽」、第3章「地域文化としての武漢」においても、それは反映されている。

また、武漢の漢味小説の形成を論じるにあたって、社会的な状況、たとえば武漢市作家協会の果たした役割などにも、十分に検討を加えるとともに、小説・散文などの分析を通して武漢の作家たちの個人的資質にも配慮を怠らない。こうした多面的な検討により、叙述が極めて分かりやすくなったといってよい。そしてまた、十分に資料的価値を持つにいたっている。

ただ、問題点をあげれば、全体を通しての叙述を貫く理論的方法的な一貫性が明らかでなく、その結果、分かりにくい部分もある。文章がこなれていない個所も若干見られる。しかし、これらも本論文の価値を損なうものではない。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと判断する。